

竹とんぼ

安藤鶴夫

安藤鶴夫 (あんどう・つるお)

1908年東京生れ。1934年法政大学仏文科卒。東京新聞社(当時都新聞社)入社。演芸記者として活躍。1960年「芸阿呆」で芸術祭賞を、1964年には小説「巷談本牧亭」で直木賞を受賞。

文部省芸術祭執行委員、東京都芸術祭常任委員。日本演劇協会常任理事。

著書に「落語鑑賞」評論集「芸について」随筆集「雪まろげ」などがある。

書 名 竹とんぼ

定 価 450円

発 行 昭和39年7月15日第一刷

著 者 安藤鶴夫

発行者 朝日新聞社 浜名二正

印刷所 図書印刷株式会社

発行所 東京 北九州 朝日新聞社
大阪 名古屋

竹
と
ん
ほ

目
次

乗馬芸者	78
火事ごっこ	68
帯はやなぎ	58
弟子	49
ひげちゃん	38
あやめ咲くとは	28
あかね雲	17
花の家	7

芸	157
茂原へ	147
鈴の音	137
横櫛お富	128
絹糸草	118
電気パーマ	109
リンゴの唄	98
世の常の恋	88

T・A・G	春の雨	湯上り	柳まつり	オムレツ	きやり	慰労会	秋 天
235	225	216	206	196	186	176	167

東京の空	夏・冬	流 燈	羽織おとし	お笑いトリオ	はぜとビールと
296	286	276	266	256	246

題字 佐野繁次郎
扉絵 松田 稜

竹
と
ん
ぼ

安
藤
鶴
夫

花 の 家^や

1

あとからわかったことだが、妙な硝子^{がらす}戸^どで、ちよつくら持ちのこそ泥が、うっかり下駄箱にしまい忘れた靴^{くつ}を持ち上げていく時なんかには、すうッ、と、音もなくあいちゃうくせに、こそ泥なんかでないのが、こんちは、とあけるとなると、さて、すらッとあかないのが、この玄関の戸なのである。

花の家と少し大きく書いて、すぐ、そのわきに、ちよつと、小ぶりに、花山いろとある表札をみて、あ、ここだな、とすぐわかつて、ベルを押してみたが、案の定^{じよう}、音がしない。

これも戦争に負けたためである。

「ごめん下さいまし」

といいながら、戸をあけようとしたが、動かない。

もういちど、こんどは両手を掛けて、

「ごめん……」

と、力が入って、ようやく、少しあいたので、

「下さい、まし」

と、とくに、中へ聞かせるようにした。

去年あたり作ったとみえて、ひどいスフの国民服である。

ぜんたいが、くたびれて、下のほうにだらアンとしてはいるが、一生懸命に、寝押しでもしたとみえて、ひどいなりに、なにか、手入れをしているという感じである。

「どなたア？」

花柳界特有の女の声で、ちょっと、間があつて、

「どなた？ お入んなすって」

といいながら、立ってきたのと、硝子戸ががたツと、ちょうど一人分が中へ入れるぐらにあいたのが、同時である。

入って、こんどはしめようとしたが、さて、一向にしまらない。

「駄目、駄目、素人がやったって駄目」

そういつて、玄関へ降りて、なんのこともなく、つウツとしめた。

このひとが、おいろさんでんだな、と思った。花の家の女将である。

面長で、目が大きくって、師匠の清堂から聞いている話だと、たぶん、もう六十を越している筈なの

に、からだぜんたいに色気があって、すらツとして、昔ア、さだめし美人だったろうと思った。
うッすら化粧をしていて、ぶうーんといいいにおいがした。

そういえば、配給タバコのものぞみだの、新橋の駅前の地べたで、巻きながら売っている私製のヤミモクだの、自分がタバコをのまないから、一層、そうなのかも知れないけれど、日本人という日本人が、みんな、そんな枯れツ葉のにおいをさせている。

ものごころついてからこつち、まるつきり、戦争ばかりみたいなのだったので、こんないいにおい、生れてはじめて嗅いだと思った。

おいろは、すぐ、上へ上がつて、

「お入んない」

といいながら、どンドン、部屋の中へ入ってしまったて、長火鉢に坐りながら、

「あ、どなた、お前さん？」

といった。

去年、戦争に負けて、一と月目に、町内になん足だか軍靴の払下げがあった時、おふくろが、
「妙法蓮華經觀世音菩薩普門品第二十五」

と、一時間半も行列に並んでいる間中、一心不乱に念じつづけて、ようやく当った軍靴である。
そうでなくても、そこへ、なんでもものを置いたら、すうと、なくなってしまう時なんだから、おふくろが観音さまを念じつつ引当てた軍靴なんぞ、仇やおろそかには、うっかりぬげない。

かといって、はじめてやってきたうちで、ひとりで下駄箱をごとごとあけたりして、そこへしまうというのも、へんに、図々しくって、いやである。

横に、長いくつぬぎ石の、その裏の方に、そつとかかとの方を立てかけるようにして、揃えて、置いた。

ぶくぶくの、これも特配になった白い軍隊の靴下だが、いまにも、つるつとすべりそうな、黒びかりのしている板の間があつて、その右の方の部屋から、

「お入んなさい」

といわれたので、もういちど、

「ごめん下さいまし」

と、いつて、入った。

長火鉢の向うに、おいろが、こんどは急に気取つて、つうーんとした感じで、急須に湯をついでいる。そのうしろに、もとは金庫の置いてあつたような空間があつて、そこへ、いろいろ、ごたごたと、なにか置いてあるのをかくすために、細い、たてじまの、女ものの衣裳を利用したと思われるのれんのようなもの、さがっている。

上がお詠えの通りお稲荷さんの神棚で、かわいい御神灯がさがっている。

こっちの隅に、蓋をあけると、そのままそれがテーブルになる帳場があつて、その上にも、なんだかごたごたものが置いてあるが、その隅ッこの一輪ざしに、ぴんと、桔梗がさしてあつた。

「お上がんさい」

そういつて、ぬッと、長火鉢越しに、茶托ちやたくにのせた茶碗を出した。

「ありがとうございます」

と受けて、スフのズボンの、右の膝ひざの前に置いた。

「誰さ、あんた？」

「すみません、どうも」

というのが、鉢合せをした。

まだ二十はたちか、せいぜい二十一、二というところだろうが、こんな年頃の若い者もんで、戦後、ごめん下さ
いまだの、ありがとうございます、などというせりふのいえるのをみたことがない。

これも、いま時の若い者にはめずらしく、目もとに、なんともいえない愛嬌あいせうがあつて、
「一勇齋清鳳いちゆうさいせいほうと申します、どうぞ、よろしくお願い申します」といつた。

2

お願い申しますのだ、おたのみ申しますなどときたしにやあ、おいきたッ、てんで、男なら、すぐに
向う鉢巻になりたいおいろだが、そんな時、すぐに、

「いいとも」

とか、ああいいとも、とかいって、五月頃から恰度いま時分の九月頃までだと、両腕の袖をくいツと肩とこまでたくし上げて、それから、鼻をほんのちょいとすすっておいて、すぐに、その鼻を左と右にぶるぶるツと動かすのがくせなのである。

なぜ、五月頃から九月時分までだと、腕をまくってみせて、あとはそうしないかという、寒いからである。

鼻をちょいとすすって、すぐに鼻を左右にぶるぶるツと動かすのは、だいたい、緊張したり、昂奮したりした時のことで、やっぱり、一種の癪のせいかも知れない。

上総で生れた。

二つの時、故あって一と足さきに上総を立退いた父親のあとを追って、母親に連れられて、日本橋の駿河町にやってきて以来、あとは新橋から芸者に出て、それからこの銀座西八丁目のうちで待合の女将になったのだから、黙っていれば、立派に東京ツ子ですませるのに、なんだか、上総生れということに劣等感があるのである。

だから、お願い申されたり、おたのみ申されたりでもしようものなら、春から秋くちまでだと、すぐに、肩まで両腕をまくるのである。

「えらいんだってね、お前さん」

そう、急にいわれたので、清鳳がびっくりして、顔だけ、少し笑っていると、

「清堂ンとこへは、あれだってね、小学校のさ、六年の時から、弟子ンなったってえじゃアないか」

「へええ」

通い弟子というやつで、

時に元禄十五年極月中ごくげつなかの十四日、夜討ようちちの勝負はかねての計略、討ッ立つ時刻は丑うしの三つ、まんじ巴えもとと降る雪に、月の光は味方の松明たいまつ、鎖帷子くさりかたびらに身をかため、小手脛こてすね当ても嚴重しこうずきんに、鍔頭巾かしろを頭にいただき、白山足袋しろやまたびに武者わらじ、銀の短冊目印たんざくめいに、表は浅野内匠頭たくみのかみ家来なにかしなんの某なにかしと姓名しる記して肩につけ、亡君の、御恩は深き海よりも山と川との合言葉……

と、十三から講談という芸を習った。

九つの時に父親に死なれて、あとは苦しい戦争の中を、母親の女手ひとつで育ったが、いつもにこんなことあかるく、勉強も出来たし、それに学校では話の方の真打しんうちであった。

だから、一勇斎清堂のところへ弟子入りをする時にも、学校の先生がすすめたくらいである。

川崎の、野球の強い高校を卒業して、この春、清鳳という名をもらったが、ひろい東京に、もう、一軒の講談の定席じようせきというものがなかった。

佃島つくだじまの初音亭はつねていという、ふだんは浪花節をやっている寄席よせで、はじめて舞台に出た。

そんなことを聞いている間中あいだ、五分おきぐらいに、おいろは、

「おきよや」

と、半分、立上がるぐらいに、からだをのばしては、呼んだ。

「はい」

と、手拭いで両手を拭き拭き、板の間のところで立つて、

「なんです？」

そういつておきよが清鳳をみるのと、清鳳がおきよを見上げた目とが合つて、こんどは清鳳に、

「いらっしやい」

といった。

べつにとりたてて、特別な働きをしているわけではないのに、このおきよという女中は、一ン日中、一年中、どんな時でも、いつでも、なんだか、ひどく、ひとりで働いているようにみえるという女である。

おいろとは十ばかり若いから、五十がらみか。

まだ、芸者のおいろで出ていた頃からの古い女中で、待合になつてからというものは、実際にはこのおきよが女将みたいなものである。

それというのが、おいろはまったく金勘定かねかんじようが出来ないからである。

出来ないという、うそになるが、しないというのが、ほんとうである。

客が、勘定を払おうとすると、おいろは、

「なんですねえ、そんな、水くさいッ」

と、いった。

そういいながら、右手を前に、やだよッ、という風に振るのである。

まるで、いやなことでも、されたようにである。

だから、折角、勘定を払おうとした客も、一瞬、ちょっとためらっていると、もういちど、

「どうして、そんな、やなことすんの？」

といいながら、きゅうーッと、こんどは色っぽい目つきで客をにらむ。

これでは、出しかけた札入れを、またそのまま、上着の内がくしに、すんと、と落すのはあたりまえである。

金なんかなくなつたつて、おいしいものがたべられて、好きな着物が着られて、毎日、おもしろおかしく暮せた明治の芸者の氣つぶが、骨の髄までしみこんでいると思えばいい。

そのくせ、おきよや、と呼んで、はい、なんです？ と顔を出すと、

「新座敷の電気ア消えてるね？」

と、いう。

毎度のことだが、なにもわざわざ呼んでまで、と、少しむかついて、

「消えてますよ」

そういつて、戻ろうとすると、

「あ、ちょいとちょいと、お辛いがあつたらう？ このひとにお上げな」

この焼け残りのうちは、玄関と、それから玄関と並んで、表通りに面しているこのお帳場といわれている部屋はいいが、あとは、ひるまでも電灯をつけないことには、なにがなんだかわからないような、